

平成五年 文部大臣年頭の所感

文部大臣 森山眞弓

特集

芸術文化支援の新たな展開

巻頭言

10 文化支援について思う

●鈴木治雄

インタビュー

12 企業による芸術文化支援の方向性

●塚本幸一／(聞き手)日紫嘉恵美

16 芸術文化支援に求めるもの

●森下洋子／(聞き手)有松育子

論文

20 「バブル後」の企業メセナ

●根本長兵衛

24 芸術文化支援の根底にあるもの

●倉林義正

エッセイ

28 感性は「場数」で磨かれる

●残間里江子

事例紹介①

30 地域に根ざした文化の振興のための実践

●(財)東洋信託文化財団

事例紹介②

33 真に豊かでゆとりのある地域社会の実現を願って

●(財)よんでん文化振興財団

事例紹介③

36 アマチュア・オーケストラ支援活動

地道に継続して12年 ●トヨタ自動車株式会社

事例紹介④

38 芸術文化を通じた社会貢献について

●日本アイ・ビー・エム株式会社

事例紹介⑤

40 郷土の未来のための黒子役

●林原グループ

事例紹介⑥

42 芸術文化支援による地域文化の発掘

「ふるさと交響楽」づくりを中心に

●岩谷産業株式会社

資料

44 民間企業等による
芸術文化支援活動に関するデータ

46 芸術文化助成財団協議会会員一覧

48 芸術文化支援に関するQ&A

50 文化政策推進会議審議状況について

カラー

1 知の宝庫—博物館
屋久町立屋久杉自然館(鹿児島県)4 まつり風土記
八戸のえんぶり(青森県)表2 名作シリーズ
四季山水図屏風表3 文化財紹介
白山麓の積雪期用具54 人・この道
那須武雄55 教育・文化と地域づくり⑩
北海道上湧別町

58 焦点一文教施策

70 私の本棚から
尾上久雄

71 ことばの小箱／やさしい教育用語の解説

72 ニューススポーツ・レクリエーション
チュックボール74 ふるさとのうた
最上川舟唄76 科学のひろば
国文学研究資料館②

78 海外教育ニュース

80 郷土に生きる教育家群像⑬
福岡県

84 編集後記

イラスト／赤羽根秀一・内部敬生・須田博行

Interview



●聞き手

文化庁芸術文化活動支援専門官

有松育子

有松 本日、我が国の芸術文化の状況、芸術家から見た芸術文化支援の在り方などについて、松山バレエ団の森下洋子さんにお話を伺いたいと思います。

はじめに森下さんの最近の御活動から伺いたいと思いますが、バレエ公演は年に何回くらい行っているのでしょうか。

森下 松山バレエ団は年に七〇回くらいでしょうか。日本のバレエ団の中ではとび抜けて回数が多いのですが、ベルリンやウィーンのパレエ団でも公演は月に一回程度というところが多く、海外と比べても多い方だと思います。公演回数が多いということは、それだけ創作活動の成果の発表の場が多いということ、我々にとってはとてもありがたいことです。

有松 海外でも何度も公演していらっしゃるんですね。

森下 昨年九月に八年ぶりに中国に行ってきましたし、二年ほど前はアメリカ公演を行いました。



バレリーナ 森下洋子

芸術文化支援に求めるもの

芸術文化に親しむ機会を

有松 海外で公演された御経験から、バレエを含めた芸術文化全般についての人々の接し業の方にも有名な外国のパレエ団を名前だけで呼んだりするのでなく、日本人にしかできない独自の芸術をつくり出そうという地道な試みに対する理解を深めていただいて、御自身がそういう芸術文化に興味を持っていた上で支援していただければ、我々としても大きな力になると思います。最近企業の中にも芸術文化支援の意義について御理解くださっているところが多くなっているようですし、私たちとしてはいろいろな企業に支援していただきたいと思っていますので。

地方の文化活動について

有松 これまで全国各地を公演されてきている中で、地方の文化活動の状況について、何か変化は感じになりますか。

森下 まず大きいのが地方にすばらしい劇場が多くなってきたということでしょう。地方の人たちの間にある芸術や文化に親しみたいという気持ちの一つの表れだろうと思います。それと同時に観客の方々がとても素直に反応してくださいます。声をかけてくれたり、立ち上がって拍手をしてくれたり。

有松 それだけバレエが人々の間に浸透して構えずに観られるようになったということでしょうか。

有松 本日は、我が国の芸術文化の状況、芸術家から見た芸術文化支援の在り方などについて、松山バレエ団の森下洋子さんにお話を伺いたいと思います。

はじめに森下さんの最近の御活動から伺いたいと思いますが、バレエ公演は年に何回くらい行っているのでしょうか。

森下 松山バレエ団は年に七〇回くらいでしょうか。日本のバレエ団の中ではとび抜けて回数が多いのですが、ベルリンやウィーンのパレエ団でも公演は月に一回程度というところが多く、海外と比べても多い方だと思います。公演回数が多いということは、それだけ創作活動の成果の発表の場が多いということ、我々にとってはとてもありがたいことです。

有松 海外でも何度も公演していらっしゃるんですね。

森下 昨年九月に八年ぶりに中国に行ってきましたし、二年ほど前はアメリカ公演を行いました。

有松 そのあたりは歴史の違いということもあると思いますが、育ってくる過程で芸術文化に対してどの程度親しみをもってきたかという点と関係が深いのではないのでしょうか。成長する過程で、一般の人々が芸術文化に親しむ機会を作ることは大切なことですが、もう一つ、行政の芸術文化担当者や支援を行う企業の担当者にも芸術に対する素養が身につけていないと適切なサポートができない、ということもよくいわれますね。

森下 やはり企業の方々には、日本の文化、日本人独自の文化を創造しようとしている努力を理解していただきたいと思っています。これは私たち芸術家の責任でもあるのですが、企業

方楽しみ方についてどのように感じですか。

森下 特にヨーロッパでは昔から一般家庭のごく当たり前の生活の一部として、オペラやバレエを楽しむために劇場に足を運ぶという習慣があるのですね。こういうところは、お父さんは企業で忙しく働いている、お母さんは子供の世話で外に出られない、という日本の状況とはずいぶん違っています。それに、社交の場での話題として芸術の話がしばしば登場することからも分かるとおり、政治家の方々もよくオペラやバレエを御覧にいらっしやっています。

Interview



もりした・ようこ 3歳からバレエを始め、昭和34年から橋秋子に師事。昭和46年松山バレエ団に移籍。昭和50年文化庁在外研修員。バルナ国際バレエコンクール金賞、昭和60年第41回日本芸術院賞、英国ローレンス・オリビエ賞受賞。



のです。ただ、このような場合、企業の経営状況が悪くなると支援が削られるということがあるらしいのです。

芸術文化支援に望むもの

有松 日本でも経済情勢の変化によって、企業の芸術文化支援に一時の勢いがなくなってきたのではないかとはいわれていますが、こういうときこそ企業としての理念を持った支援を継続していただきたいところですね。

森下 企業の中には、創立何周年かの記念行事にうちのバレエ団を呼んでくださって社員全員に観てもらおうというようなところもありますよ。温泉旅行に行くのではなくね。まず個々の企業のトップの方たちが芸術文化に目を向けてくれるようになればと思います。

有松 松山バレエ団にもバレエ学校があつて、たくさんの子供たちがバレエを習っています。最近バレエの裾野の広がりという点ではどうでしょうか。

森下 塾通いをするのが多くなつて、バレエを習う子供が減るという話を聞くことがありますが、うちのバレエ学校に関してはそんなこともなく、バレエ全体の裾野はかなり広がってきていると思います。それに、御自身は

よりよいパートナーシップに向けて

有松 芸術家は信念に基づいて自分を表現するために芸術活動を行うわけですが、一方企業は企業なりの理念に基づいて芸術文化支援を行うわけで、芸術家と支援企業というのはそれぞれの目指す方向があつて、お互いそれを尊重しながらパートナーシップを持つてくれた芸術文化を生み出していくというのが一つの理想の姿だと思うのですが、その際に芸術家として企業に求められるものがありますか。

森下 やはり、目先の名前にとらわれないで日本人が地道にやっているものに對してもつと目を向けてくれるようになると思います。言い替えば、芸術文化に対する理解を深めていただくということでしょうか。バレエは西洋からきたものですが、日本は今、世界の中でも注目を集める存在になってきています。皆さんに本当にバレエを理解していただくためには、我々芸術家の努力が必要であることはいうまでもないことで、いろいろなものを取り入れながら、方向をきちんと定めて、信念を持って取り組んでいかないと、支援してくださる企業の方からも地に足の付いた支援は望めないと思います。このことは

バレエをやっていない人がたくさん観に来てくださいます。以前はバレエ公演を観に来るのはバレエ関係者と親戚だけということもありましたが、今では考えられないでしょう。こういう芸術文化の輪の広がりに企業の方たちも目を向けて支援をしてくださるようになればと思います。

有松 芸術文化支援は、国、地方公共団体、民間企業等がそれぞれの特色を生かしながら行っていくべきものであると思いますが、芸術家の立場から、特に望まれることがありますか。

森下 最近国にしても、地方公共団体にしても、良く理解してくださっていると思います。私たちにとっては、やはり発表の場が数多くあるというのが一番ありがたいので、今後ともそういう場を是非積極的に設けていただきたいですね。

有松 公演回数が多い、あるいは増えるというのは、それだけ観る側に需要があるということで、人々の間にバレエが定着してきたという証拠でもありますね。

森下 最近では地方の小さな町でも公演の切符が早々に売り切れになることが多いのです。そういうことを聞くとやはりうれしいですね。

特にバレエだけに限ったことではなくて、他の芸術でも同じで、納得のいく芸術が生み出されたときにはじめて自信を持って企業に對して「ぜひ理解して支援してください」と言える状況になるのではないのでしょうか。

有松 企業が芸術文化に對して深い理解を持ち、先を見通した息の長い支援を続けることが芸術家と企業双方の良い関係を築くための最良の手段であるということのようですね。

では最後に、今後の抱負などについてお聞かせ願えますか。

森下 やはり、一つ一つの舞台をお客さんが本当に満足して帰ってくださるようなものにしていくということが最大の目標なのです。何年か先に目標を何に掲げて、ということではなくて、これだけ舞台の数が多いということとはバレーリーナにとって非常に幸せなことです。それから、それを無駄にしないように。バレエが日本に入ってきてから今年で八〇年だそうです。日本のバレエはやつとここまで来ました。開化するまでに時間のかかる芸術ですから、皆さんにもあせらずに、じっくり見守っていただきたいと思うのです。

有松 本日はお忙しい中、いろいろなお話をお聞かせいただき、ありがとうございます。この度は客席からお目にかかりたいと思います。

特集

エイズ教育

◆巻頭言
エイズ教育に期待する 塩川優一

◆座談会
学校におけるエイズ教育を考える
(出席者 竹井操/平山宗宏/福本絹子 南谷幹夫/司会 近藤信司)

◆論文
エイズ教育の専門家として 武田 敏

エイズ患者の検診に当たる 根岸昌功

◆エッセイ
事例紹介 草柳文恵

◆事例紹介 東京都教育委員会ほか

人・この道 東 三郎

教育・文化と地域づくり 長崎県郷ノ浦町

郷土に生きる教育家群像 香川県

編集後記

▽新年明けましておめでとうございます。今年も、「文部時報」が文部省の総合広報誌として一層充実するように、編集部一同頑張りますので御愛読のほどよろしくお願ひいたします。

▽暮れから正月にかけては、いろいろと伝統行事も多く日本の伝統文化を意識することが多くなりましたが、新年早々の今月号の特集は、「芸術文化支援の新たな展開」として、企業等による民間のメセナ活動を取り上げています。

これは、折からの芸術文化への国民的な関心の高まりと企業の社会貢献熱に乗って様々なメセナ活動が展開されている状況を受けての特集であります。

▽最近、新聞等においては、いわゆるバブル崩壊に伴ってメセナ活動の危機をうたえる意見も見られますが、本特集では「事例紹介」として、企業側からみた芸術文化

支援についての考え方や具体的な取組も紹介しておりますので、我が国の芸術文化支援策について考える一助となれば幸いでありまして、▽「教育・文化と地域づくり」では、北海道上湧別町の「オホーツク国際漫画大賞」を取り上げております。これは今では日本ばかりでなく世界からも作品が寄せられるほどになったという北国の漫画によるユニークな町おこしの紹介であります。

編集幹事が、小学校低学年のころに見た漫画は、「鉄人28号」や柔道少年の物語である「いがり君」であり、四〇年経つ今でも記憶に残っています。

漫画の力はほんとうに大きいと思います。上湧別町の漫画も地元の多くの少年少女たちにすばらしい初夢を与えてくれたのではないのでしょうか。

(A・S)

投稿歓迎

『読者からのたより』欄への投稿を歓迎します。本誌を読んだの感想、ご意見等をごししお寄せください。

●投稿規定

- ① 一件につき四〇〇字以内
- ② 住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記(誌上匿名可)
- ③ 掲載分には薄謝進呈

※文章を一部手直しさせていただくことがあります。

●送り先

〒100 東京都千代田区霞が関三二二二

MESC 61 月号

文部時報 1月号

第1393号

●著作権所有——文部省◎

●発行所——株式会社 きょうせい

本社 〒104 東京都中央区銀座7丁目4番12号

(営業所) 〒162 東京都新宿区西五軒町4-2

電話 03-3268-2141(代表) 振替口座 東京9-161番

●印刷所——株式会社行政学会印刷所

平成5年1月10日印刷
平成5年1月10日発行

定価500円(本体485円)(〒61円)

年間購読料6,000円

- ・ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます。
- ・なお、購読のお申し込みは直接営業所またはよりの書店にてお願いいたします。

誌の掲載文のうち、意見にわたる部分については、それぞれ筆者個人の見解であることをお断りいたします。

Printed in Japan 1993 ISSN 0916-9830